國學院大學学術情報リポジトリ

段注と「アミ」を表わすモジについて：率・畢を中心として

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大橋, 由美
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000815

段注と「アミ」を表わすモジについて
――率・畢を中心として――

大　橋　由　美

キーワード
段注（段玉裁『説文解字注』）　六書　象形　文と字　アミ

はじめに

後漢の許慎（58 年？- 147 年？）が著わした『説文解字』（説文と略す。100 年成る）の十五篇の叙には、古の聖天子である黄帝の史（史を記録する官吏、左史）である倉頡が、初めてモジを創ったと記される。もちろん、今日的な視点からは、倉頡一人がモジを創ったとは伝説であると言うほかはないが、単字につき解説した所謂字書の濫觴である説文に記されるゆえ、「倉頡創字」とすることは、中国のモジ、即ち漢字について学ぶ者たちにとっては、周知のことといえよう。(1)

このように衝撃的且つ懐疑的ではあるが、叙には何故モジを創ったか（創らねばならなかったか）、どのように創ったか、などのモジ創造に関する興味深い伝説が記される。

例えば、「黄帝之史倉頡見鳥獸蹄迒之迹、知分理之可相別異也、初造書契。」（十五篇 1b）とある。今見られる倉頡の画像では、目が四つ（二組）ある。(2)

「じっと観て、観たある対象にはそれぞれ特徴があり、その他と明らかに異なるものがあると気付いた。ゆえに、その特徴を捉えて、他と紛れない形をもつモジを初めて創りだした」ということであろう。以前にもモジ（今日的な意味ではなく、記号として）を創ったヒトはいたが所謂モジを創ったのは倉頡であると段玉裁（1735-1815）はこの段注（『説文解字注』、段注と略す）で説く。

じっと対象を観て創り出されたモジは他とは紛れない形を持つものとして完成されているとは、尋常ならぬ人でなければ創出できず、その創り出し方もまた神がかかっているといえよう。しかし、今日に至るまで使われ続け、その恩恵を受け続けるといえる中国のモジに纏わる伝説には、どこかモジを創り出すための工夫や方法の一端を探る手がかりと見なせることがあるのではないかと想わせないだろうか。

倉頡は最初のモジ書契（契みつけることによって形を成すのでこういう）を創ったが、続けて「倉頡之初作書、蓋依類象形、故謂之文。其後形聲相益、即謂之字。文者、物象之本、字者、言孳乳而浸多也（倉頡が初めてモジを作ったが、（それは）蓋（たぶ）ん類ごとに依って形に象ったので、故に文（もん）（文様）と謂う（意味）のであろう。その後は（ことばを表わす）字形と字音が互いに益えたので、それで則り（こうやってできたモジを）字（じ）と謂う（意味）であろう。文とは物の象（かたち）の根本で、字とは孳（じ）乳（そだてふやす）してそうして浸（ようや）く多くなることをいうのである」と叙にある（2a）。段注は倉頡が創ったモジは文、象形であるとする。以下に所謂六書について論じられ、段氏は「六書」下に注して「モジの構造と用法に関する総合的な概念」と説き、六つは4（実は「2+2」）+2であると具体的に以下のように述べる。

一曰**指事**。指事者、視而可識、察而可見、「上、下」是也。
二曰**象形**。象形者、書成其物、隨體詰詘、「日、月」是也。……以上、文・体の1
三曰**形聲**。形聲者、以事爲名、取譬相成、「江、河」是也。
四曰**會意**。會意者、比類合誼、以見指撝、「武、信」是也。……以上、字・体の2（合せて体）
五曰**轉注**。轉注者、建類一首、同意相受、「考、老」是也。
六曰**假借**。假借者、本無其字、依聲託事、「令、長」是也。……以上、用

段氏は、これらのうち指事と象形（狭義）が、実は（広義）象形であり、他ならぬ倉頡が創ったモジはこれらで、これ以上分けることができないものであり、これ以後発展増加する合体のモジに対し単体である、と説く。會意と形声は倉頡以後とする。

叙で言う倉頡がじっとこの世を観渡し観察し、この世の全てを著わすモジ（音声でもって意味を表すコトバとしては既に長く存在していたが、それに形を与え、目に見える表記法としたもの）として創り出したものは、六書でいう指事と象形で、段氏が説くところの単体のモジということである。

本小稿では、これらの段注が説く六書の「象形」（広義）によって創られたモジのうち、倉頡がこの世を凝視して創ったという漁猟具とされてきたアミ表わす文、主に率及び畢（以上11画）をば対象する。段注によってアミの原初的文や発展してゆく関連する他のいく

つかの字も取り上げ、アミの諸相（発展変化）について考察する。

本稿における凡例は、順に、

・説文（段注）における掲載篇（葉はａはオモテ、ｂはウラ）、見出し親字である楷書・小篆（篆文）

・㊀～の漢数字は、段注による段落分けされた所謂説解。

・Ａなどは、見出し親字以外の所謂重文

・段注は説解ごとに㊀以下別けて解釈

・説解、段注に付す①～は筆者の注

である。必要に応じて筆者の解釈を付す。

一　十三上 40 ｂ　率（率部）　率

説解

㊀捕鳥畢也（鳥を捕る畢（あみ）である）。

㊁象絲罔（絲で編んで作った罔（あみ）に象る）。

㊂上下其竿柄也（小篆の上部と下部が其の竿の柄だ）。

㊃凡率之屬皆从率（凡そ率の属は皆（すべ）て率を構成成分としてもつ）。

筆者補注

分けて後に詳述するが、アミにはいろいろな種類があり、以下の罔（网の異体字）もその類である。このモジは、単純なその字形から、最も初めのアミであると想われる。象形によってできた文である。絲部に続き率（部首）があるから「イトをあむ」ことによって作られたアミで象形であることが重要と理解できる。

部首であるが、後に「文一」とあるから、この率部に属す文字は実はこの率（部首）１字のみとわかる。なぜこの１字だけからなる部首を設けるのか、興味あることで、いずれは考究すべきだが今はおく。今日の漢和辞典類では、おおかたは「玄」部に収められているようだ。今日的部首の考え方では、清代勅撰の『康熙字典』を主に受け 240 部程度で、説文とは異なることが大きな理由だが、文字分類上の便宜・検索の便を考えモジの形に注目したもので本義とは関係がないことが多い。

率は、説文では十三篇 1a に始まるイト（糸・糸）に関し、糸部に次ぐ素（シロイト・素）部、絲（蚕が吐き出すイト・絲）部の次に１字のみ置かれ、その次は虫（一説にマムシ・虫）部である。編纂上字形の関連性を重視する部首字の配列方針を考えれば、後漢の

許慎の観かたを以てすれば虫部は「そうかもしれない」ということであろうか。段氏は十五篇52aでは蒙けることについては触れない。ただ、説文の終盤は人々の暮らしに深く関する部首をまとめているようにも見受けられる。幺（ちいさい・呂）部を蒙けて続く玄部は四下4b「㊀幽遠也㊁象幽㊂而入覆之也㊃黒而有赤色者為玄㊄凡……」の説解②下の段注に「呂を謂う（意味する）のである。小さければ則り隠（かすか）」とある。

部首はこの世の中を構成する基本的な要素と考えたので、まずは当時はイトを編んで作ったアミは、欠かせない世の中の構成成分であったといえるだろう。アミを創ったのは、伝説上は伏犠（説文は庖犠と表記）で、『史記』「三皇本紀」に伏犠が網を編んで漁獵を民に教えたとある。『三才圖』にその画像があり、わが国の『和漢三才圖』「漁獵具」に数種のアミが描かれ違いが簡単に説明されているので、姑く視覚的な参考とする（末尾の画像を参照）。

段玉裁　段注

㊀　畢（4下1a）とは、「田网也（田用の网である）」。[①] 鳥を捕える所以で、或いは亦た同じく率と名う（シュツと名づけられる）。わたしが按るに、此の篆文（率という字体）では、本義（アミ）は行われない。凡そ衛（二下19a）は「將衛也（ヒキイル）」[②] と訓じられ、率（二下2b）は「先導也（さきにいて後を導く・ミチビク）」[③] と訓じられるが、皆に本字（この二字衛率）は用いずに（これらの意味で）「率」を用い、さらにまた或いは「帥」（七下45a）を用いる。[④]

（この例の証拠としては）『詩経』（大雅）「緜」の傳で「率、循也」[⑤] といい、（小雅）「北山」の傳で「率、循也」[⑥] というが、其字は皆に當然率に作るべきであるのが、是である。さらに又「帥」字の段注に詳しい。

『左傳』（桓公2年）の「藻率」では服虔は「禮有率巾」というが、これは卽り他でもなく許書（説文）の帥である。[⑦]『周禮』春官宗伯　巾車）

㊁　（忞、真ん中の部分）を謂う（意味する）。

㊂　上部は其の竿の露わなもので、下部は其の柄である。畢には网と長い柄がある。所律切（シュツと発音）。（私の古音節では）十五部。[⑧]

筆者補注

①　畢については後に論じる。

②―A 衛（二下19a）　衛

㊀　將衛也（ヒキイルである）。

㊁　从行。率聲（行を構成成分としてもち、率がその発音）。

㊀「衛也」は今本では「衞也」に作るが、誤る。「將」は、如えば「鳥將雛（一人前のトリが幼くか弱いヒナをたすけてつれてゆく）」というような場合の「將」だ。古は発音上で平聲（廣韻は精陽切、今はタスケル・ヤシナウ意を担う）と去聲（『廣韻』は精漾切、今は軍隊などをヒキイル隊長）とは分けなかったのだ（「六書音韵表」表一・古四聲説）。衛は「導也（ミチビク）。循也（シタガウ）」で、今の「率」字で、率が行なわれて衛が廢れてしまった。率とは、「捕鳥畢也」である。將帥（ヒキイル意）の字は、古は衹だ將衛（の衛）に作った。帥が行われて衛がさらに又廢れてしまった。帥とは、「佩巾也（佩びぬの）」である。衛と辵部の遳とは、音と義は同じだ。

㊁　所律切（シュツと発音）。十五部。

参考：『廣韻』では衛は入聲六術に入る。所律切・生母合口三等諄韻

②―B　將（三下 29b、寸部）　將

㊀　帥也（ヒキイル）。

㊁　从寸（寸を構成成分としてもつ）。

㊂　醬省聲（醬の省略體がその発音）。

㊀　帥は當然衛に作るべきである。（なぜなら）行部に「衛、將也」といい、二字は互訓（段氏は師である戴震の説を受け説文序でいう六書の所謂轉注）であるからだ。『儀禮』、『周禮』では古文衛は率に作る場合が多いが、今文では多くの場合は帥に作る。　『毛詩』「率時農夫」は『韓詩』では（率は）帥に作る。（私の『周禮』についての専著）『周禮漢讀考』（『皇清経解』所収）に詳しく説いた。

帥とは（本義は）「佩巾（佩びぬの）」だ。漢人は假りて率字と爲る（説文序でいう六書の所謂假借）。率は亦た同様に衛の假借である。許（慎）は説文を造ったが、當然是に本来は「將衛也」に作り、それで以って自から其の説を伸ば（し展開）すべきである。經轉は寫して改竄したので舊来のすがたではなくなってしまったのだ。

後人は、將帥二字には、去聲と平聲の將があり、入聲の帥と別ものだと謂うが、古には是の説はなかったのである。『毛詩』では將字は故訓（古訓、古い読み方）が特に多く、「大也」、「送也」、「行也」、「養也」、「齊也」、「側也」、「願也」、「請也」だが、此れ等は或いは『爾雅』に見え、或いは見えない。皆て各おのは文に依って義と爲すからだ。亦た同様に皆ては疊韵雙聲（頭子音が同じか類似）に就きしたがってよってこのようなことになり得たのである。如えば、願・請は是に一義（願望をあらわす）であり、將は七羊反に讀む（ショウ・下平聲 10 陽韻・清母・歯頭次清）ので、故に釋して「請也」と爲るようなことであり、將が即羊反に讀む（ショウ・

去聲41漾韻・精母・歯頭全清）ので、故に（『詩経』「大雅・文王之什」）「皇矣」の傳では釋して「側」と爲るようなことであり、（『爾雅』）「釋言」及び（『詩経』「小雅・谷風之什風」）「楚茨」の傳では釋して「齊（セイ・上平聲12齊韻従母或いは去聲12霽韻従母・歯頭全濁）」と爲るようなことである。「齊」は徐仙民（東晋・徐邈という）の『周禮』に付した音注（『経典釋文』引）では「蔣細反（セイ・去聲12霽韻精母）」だ。これら皆ては雙聲（歯頭音）である。（『爾雅』）「釋言」の「將、齊也」で郭（璞）は「分齊也（わけてひとしくする）」と謂う。『詩経』を引いて或いは「肆」とし、或いは「將」とするが、此れは甚だ明畫である。或いは「肆蒙」とし、或いは「剥」とするが、剥けば乃りは互いに陳べたいらになることをいう。或いは「將蒙」とし或いは「烹」とするが、烹れば必ず水分や火加減を図り、味がととのいひとしくよろしい状態になることをいう。故に「齊其肉也（その肉を齊しくととのえる）」である。（これは）是さに乃りはそれで以って祊において祝祭（まつ）るようなことで、『詩』、『爾雅』の（邢炳）疏では皆て了らない。故に箸らかにしたのだ。

㊁　必ず法度（きまり）が有って後に主とし先にすることができる。故に寸（きまり）に従うのだ。

㊂　卽諒切（ショウと発音）。十部。

筆者補注

㊁と合わせて率というアミ（主に鳥を捕獲する）は全体が象形による文字。ここで説文の将の本義を指示し説きながら、『廣韻』以来今日では字書に多くの意味が記され、またゆえにその意で用いられる現実に言及する。そのことが「本来ではない」であると説くために、用いられる各義について丁寧に逐一反論する。その説には一貫性があり、各義が相互に関連する、つまり字義が斯くも広がり多様化し分散するのは、その各義を負うモジのとの発音上の関連があるゆえだと、力説するようだ。

字義の発展と関連には、もとの字音と発展したのちの字義をもつ字音とのあいだに通じるものがあり、それが古音における合音、つまり雙聲疊韻であるというのである。

一般に、字義の発展が単に字義の関連上広がる＝人の素直な発想によると考えがちだが、段氏は、そのことを寧ろ重要と認めてはいるものの（後述）、古人も詳細には説かぬゆえ（但し古人にとっては言わずもがなのことであったともいえるが）分かりづらいだろうが、実は字音が相通じることは重要であり、これが根底にあって、今日みる多様さを齎したことは、段氏の説文執筆の基本的な態度・学問的精神からして、必ずや明記すべきことと言うのである。

なお、『周禮漢讀考』（段氏の『周禮』に関する専著。段注作成以前に作成し、段注にその説が反映されているという。年譜によれば、1750年頃作成された）に見える説は、多

く阮元の十三経注疏に引かれる。「春官　宗伯（巾車）」には段氏の説を引き「漢讀考云、疑當作讀為藻率之藻、與典瑞司几筵繅注同、下文直謂華藻也…」とある。段氏得意の説である。また、後述③では「春官　宗伯（樂師）」「帥射夫以弓矢舞」の校勘記で「漢讀考云、率與帥今人混用、而漢人分別。毛詩率時農夫韓詩作帥時農夫、周禮帥都建旗、說文作率都建旗、聘禮注曰古今帥皆作率、凡周禮帥字故書當皆作率」と全面的に認めたように引く。

③　二下 2b　𨑓（辵部）　𨑓

㊀　先道也（さきにいてみちびく）。

㊁　从辵。率聲（辵を構成成分としてもち、率がその発音）。

㊀　道は今の導字である。𨑓は經典では率字を假りてこれと爲る。『周禮』「燕射」の「帥射夫以弓矢舞。故書帥爲率」では、鄭司農は「率當爲帥」という。大鄭（鄭司農）は漢人（かんひと）が帥領の（帥）字をば用いることをば以ってそれゆえ通じて帥に用いた。周の時代で率を用いたこととは同じではないゆえである。（よって）此こでは所謂古今字（の関係）である。『毛詩』（「周頌　臣工之什」「噫嘻」）「率時農夫」は、『韓詩』では「帥時」に作る。許（慎）は『周禮』「率都建旗」を引く。鄭（玄）は、『周禮』では「帥都」に作り、『聘禮』で注して「古文帥皆爲率」というのは、皆て是れである。さらに又（『爾雅』）「釋詁」、『詩経』「毛傳」では皆て「率、循也」というが、此れは引伸の義だ。先導する者がいるので、そういうことで乃り循（したが）い行くものがいるのである。亦た同様にこれを𨑓と謂うのである（そういうわけである）

㊁　疏密切（シツと発音）。十三部。

参考：『廣韻』では入聲六術韻　所律切　生母　合口三等諄韻

筆者補注

「先導する者がいるので、そういうことで乃り循い行くものがいるのである」、この条は、段氏がことばの本義（本質）をどう理解するか、ということを述べたといえよう。「乃」字がそれを十分に表現し尽くしており、「いろいろ考えられ、時間がかかったであろうが、結局はこうなのだ」、という語気であるからである。同様の論理の展開は、①の「「將」は、如えば「鳥將雛（一人前のトリが幼くか弱いヒナをたすけてつれてゆく）」というような場合の「將」だ。」にも認められる。

一語は一義、そして一音節という漢字の三属性はゆるぎない。それにも関わらず、辞書に複数の語義が列挙されるのは何ゆえか、という疑問に応えるものであろう。そして、一語であってもその一語の力強さ、或いは奥深さが本来備わるゆえに、「人のこころの自然な発想・広がり」によって、一語本来の意味が広がりゆくことを教えるようだ。同義語が

多彩であることの理由もここに求められよう。辞書に並べられたある一語があたかももつようにみえるいくつもの意味を覚える意義がないとは言わぬが、何がその語の最も基本的なイミであるかを知ることこそが、一語の意味の真の理解に繋がるにちがいない。ただ、羅列された語義のなかから、じっと一語の意味をみつめ、どう伸び出て拡散しているのか、感じ取り基本であるそれを一つ見抜く力を育てることが肝要であろう。

④　帥（七下45a　巾部）　帥

㊀　佩巾也。从巾。自聲。（佩びぬのである。巾を構成成分として持ち、自がその発音）

㊀　聲の字は大徐（兄の徐鉉）は奪す。所律切（シュツと発音）。十五部。

筆者補注

段氏は奪したままでは會意による字となるが、小徐である弟徐鍇の説に従い「声」を補い、形声とすることをいう。巾（ぬの）と自（おか）とでは、元より意味をなさない。自（音はタイ）は段氏十五部の字ゆえ、形声とし、文字の成り立ちを正した。

なお、帥には、『廣韻』ではいま去声（六至韻）と入聲（六術韻）とがあるが、ここも段氏古音説より入聲であるべきゆえ、反切下字が小韻率である。率と結びつく所以である。

⑤　大雅　綿

「走馬率西水滸至于岐下爰及姜女聿來胥宇」に「率循也」とある。

⑥　小雅　谷風之什　北山

「溥天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣」に「溥大、率循、濱涯也」とある。

なお、上記⑤とこの⑥以外にも率を訓じたものはある。

⑦「藻率鞞鞛」の校勘記には「藻率以韋為之、所以藉玉也。王五采、公侯伯三采、子男二采、鞞佩刀削上飾」さらに「鞞佩刀削上飾」の校勘記には、「宋本、淳熙本、岳本、鞞作鞞、是也○今依訂正鞛下飾」とあり、「率音律、鞞補頂反、鞛布孔反、鞞鞛刀削之飾、藉在夜反、削音笑」とある。

⑧『廣韻』で、去聲六至ならスイ、入聲六術ならシュツ。

今日では発音がいくつかあり、その発音がそれぞれの意味を負うが、段氏の考えでは、古は発音はひとつであった。この場合は、入聲を取り、古は去声がなかったとする（前出「六書音韵表　表一」「古四声説」で「古無去聲」と説く）。

二　畢　四下１a　華部の２番目の字　畢

一で先ず説解に出た畢もまたアミの一種である。アミを論じることから小稿は始まり、同義のアミを表わすモジが説文には複数みえる。人々の暮らしに欠かせない生活の道具であるアミが創られてから、それを表わすモジを如何に倉頡が創り、発展していったかを考えることができよう。

説解

㊀　田网也（田用の网である）。

㊁　从田（田を構成成分としてもつ）

㊂　从華象形（華を構成成分として持つ。象形）

㊃　或曰田聲（或いは一説に田がその発音という）。

段注

㊀　田獵用の网を謂う（意味する）。必ず「田」[①] ということについては、其の字が田に従うことをば以ってのことである（理由である）。

（『詩経』）「谷風」（大東「有捄天畢載施之行」）の毛傳に「畢所以掩兔也」といい、[②]（『禮記』）「月令（季春）」（餧獸之藥、毋出九門）の注に「罔小而柄長謂之畢」という。[③] わたしが按えるに、（『詩経』「小雅」の）「鴛鴦」の傳に「畢掩而羅之」という。[④] 然であれば則り獨だ兔だけを（上からかぶせ）掩うだけでなく、亦た同じように鳥も掩うことができるのだ。皆に上から下を覆ってする（かる）のである。

（ところでさて話題を発展させて）（二十八宿の）「畢星」は弋獵（弋で猟をする）を主る。故に畢という。[⑤] 亦た同じく罕車という。[⑥] 許（慎）は率の説解に於いて、「捕鳥畢也」という。此れは別に一か畢が有るということではない。亦た同様に是れが物を掩う网なのだ。

（また『詩経』谷風）「大東」に「助載鼎實之器象之亦曰畢」とあり、此れは則り用いて上から載せる道具だから異ると為る。[⑦]

㊁　（大小徐）各本では此の二字はない。（だから）『（古今）韵會（舉要）』に依って補う。[⑧]

㊂　華をば以って畢の形に象ると謂う（意味である）。柄が長くて中で受けることができる。畢と華とは同じだ。故に華を取り象形とする。各本では「象畢形、微也」に作り、誤りが有るので、今正す。

㊃　上で「從田華、會意」といい、其の形に象るので、則りは形聲ではない。或いは「田聲」というが、田と畢とは古音が同じく十二部に在る。[⑨] 各本は田は由に誤る。[⑩] 鉉

（大徐）は「由音拂」というが、此れは大いに誤る。⑪ 畢は卑吉切で、畢（ヒツ）の発音と意味とを一語でいえば「蔽（ヘイ）也・オオウ」である。⑫ 支部に「敾、盡也」というが、今は盡義（つきる）が通じて畢に作る。⑬

筆者補注

①　本字は、畐部の２番目の字で部首を除き最初の字である。モジ構成要素の主要なものが部首（文）とすると、分析されたそれ以外の残った部分は、同様に独立した構成要素（文）であれば、要素である文二つ（以上）から成り合体であるので、このモジは字となる。しかし、あとの説解には「象形」とあるので、段氏は畢自体は一先ず文として論じていると見なす。ここで早々に「田」を取り上げて論じるのは、目立つ独立要素（文）であるからということ（ただ文として単独で取り出すことが強ち誤りではない）、或いは段氏の古音説から「田（或いは由）」は聲符（従って形声による字）であると考えられるという前置きかもしれない。積極的に「象形」とする許慎の説解を最終的には修正してはいないので、説解で取り上げられ単独の構成要素にも見える「田」について、「田」の説文が説く基本義とモジ構成要素との関連を、以下に引用する文献にみえる証拠との関連から、ひと先ず説き始めたと考えられよう。

十三下 41b　田（部首）　㠯

㊀　陳也（つらなる）。

㊁　樹穀曰田（穀物を樹（う）えるところは田という）。

㊂　象形。（㊃・㊄は略す）

㊀　各本は陳に作るが、今正す。陳とは「列也（ならぶ）」。田（デン）と陳（テン）は、古くは皆に音は陳（チン）であり、ゆえに韵（韻母の発音）をば以って訓（よみ）と爲る。其の陳列（つらな）るさまが整（と）齊（との）っていることをば取って田と謂う。凡そ田田ということについては、卽り陳陳とならびととのいそれに因むのである。陳陳は當然陳陳につくるべきである。陳敬仲の後（子孫）は田氏と（氏を）爲た。田とは卽り陳字である。田を叚りて陳と爲たのである（田の古音が陳である証拠である）。

㊁　菜（野菜）を穜えるところは圃といい、果（果実）を樹えるところは園という。口部に見える。

㊂　各本は「象四（四に象る）」に作るが、今『（古今）韵會（挙要）』に依って正す。今人は「為从口从十（口に从い十に从う、會意）」と謂うが、許（慎）の意図するところではない。此こは、甫田（広大な耕作地）の形に象るのだ。（『詩』「小雅」「甫田」の「倬彼甫田歲取十千」に注して）毛公は「甫田謂天下田也」という。待年切

（テンと発音）。古音は陳（チン）のようだ。十二部。……（古代の土地制度でいう田を説くので以下は略す）

筆者補注

古くからの生業としてあり狩りの名として経書には散見するが、「かり」に直接かかわる意味は説解や段注には見いだせない。三下敶の「列也」の段注では、『爾雅』（釋土）の「郊外謂之田」を引く。今日の田やはたけ、或いはそのような広い（植物の樹わる）土地、またさらにそこで耕作したりその植物を狙ってくる動物を狩る、こういう意味はいうまでもないということであろうか。所謂名詞や動詞、副詞など今日的な品詞の相違は、段氏は1語の基本的な意味の自然な広がりの中に収まるとし、特に個別に取り上げて論じないことは多いといえる。

② 『詩経』）「谷風」（大東「有捄天畢載施之行」）の毛傳に「畢所以掩兔也」

③ （『禮記』）「月令（季春）」（餧獸之藥、毋出九門）の注に「獸罟曰罝罘、鳥罟曰羅、罔小而柄長謂之畢」とある。

④ （『詩経』「小雅」の）「鴛鴦」の傳に「畢掩而羅之」とある。

⑤ 「覆って獵る」といえば星座にもその名がある。二十八宿の一つで西方白虎にある七宿のうちの五番目の星座。『史記』巻二十七「天官書第五」に「畢曰罕車」とあり、張守節（『正義』）は「畢八星 曰罕車、為邊兵、主弋獵。其大星曰天高、一曰邊將、主四夷之尉也。星明大、天下、遠夷入貢。失色、邊亂。畢動、兵起。月宿則多雨。 毛萇云「畢所以掩兔也」」とあり、『詩經』「小雅·漸漸之石」には「月離于畢、俾滂沱矣（月に畢がかかったのをみれば、雨が滂沱とばかりに降ることだ）」とある。畢には八星あり、二つの星は直すぐに上向きで柄のようで、残る六星は曲って平行に並び、その間が口をあけたアミのようであることから名づけられたという。畢は「弋で獵る」を掌るといい段注は「かりする」に焦点があるようにも思うが、星座の形は（鳥を捕らえる）弋（いぐるみ）とは関係なく、柄のついたアミに似るので「かりする」から発展したものであろう。文末の『和漢三才図会』「二十八宿　畢星」参照。

⑥ 罕車には、獵車（アミを載せる車）の意（揚雄「羽獵賦」）と畢星の意（上注⑤参照）がある。以上2例は、段氏は畢星といえばと罕車（畢車とはいわない）に言及し「上か

ら下をおおう・（それを用いて）田をする」という共通点があるので同様に用いることを言う。アミと獵が結び付き、畢は（獵するための）アミである説解の本義を裏付けた。

⑦　上記⑤⑥とは異なり、同じ畢を用いてもアミや獵とは関係のない物もあるが、すべては畢と形状が似ることによって名づけられたのは注意を要することをいう。

『詩経』（谷風）「大東」（「有捄天畢載施之行」）の注に上記②「畢所以掩兔也」に続けて「助載鼎實之器象之亦曰畢」とある。

また「箋祭器至鼎實」の『正義』には、「「特牲饋食禮」曰「宗人執畢」是祭器有畢也。彼注云「畢狀如又」（「彼注云畢狀如又」の校勘記に「閩本、明監本、毛本、同。案浦鏜云、又誤、又是也」）。蓋為其似畢星、取名焉。主人親舉宗人則執畢導之。是所以助載鼎實也。掩兔祭器之畢、俱象畢星、為之必易傳者、孫毓云「祭器之畢狀如畢星、名象所出也。畢弋之畢、又取象焉。而因施網於其上、雖可兩通箋義」

『儀禮』「特牲饋食禮」の「宗人執畢先入當阼南面」の注には、「畢狀如叉、蓋為其似畢星取名焉」とある。すると、段氏が論を展開し引く証拠としての文献（経書）の順番は、二十八宿が先で『儀禮』があとというこの順で良いことになる。清朝考証学者の論の展開は自然な進め方と思われる。『禮記』「雜記上」には、「畢用桑」の疏には「主人擧肉時、則以畢助」とある。（『三才図会』参照）

⑧　畢は『廣韻』では入聲五質韻。卑吉切、幫母、開口三等臻攝。

⑨　十三下41b　田　⊕　段注は「待年切。古音如陳。十二部。」とある。

⑩　九上43a　由（部首）　⊕

㊀　鬼頭也。象形（鬼の頭部である。象形）

㊁　凡由之屬皆从由（凡そ由の屬は皆て由を構成成分としてもつ）。

㊂　敷勿切（フツと発音）。十五部。（『廣韻』では、入聲八物韻。分勿切、幫母、合口三等臻攝）

⑪　田は12部、由は15部で、合韻にならない。

また、拂は十二上51b　𢫬

㊀　過擊也（過って擊つ）。

㊂　从手。弗聲（手を構成成分としてもち、弗がその発音）

㊀　徐鍇は（『説文解字繫傳』で）「擊而過之也」という。刀部に「刜、擊也」といい拂と義が同じだ。

㊁　敷勿切（フツと発音）。十五部（『廣韻』では敷勿切、入聲八物韻）

筆者補注

15部でやはり合韻ではなく、由に同じであるが、音フツ、ウッテハラウ意では意味が通じないと主張するわけである。段氏がやや厳しい語調にも思えるのは、音義説によって同じ15部でも「蔽ヘイ・オオウ」でなければならないと考えるゆえであって、このような解説のしかたが、漢代の訓詁を重んじる段氏の考証の基本に在るといえよう。

⑫　一下38b　蔽　𦾔

㊀　蔽蔽（蔽蔽、樹の枝や葉が小さくて密集するさま）

㊁　小艸也（小さな葉である）。

㊂　从艸。敝聲（艸を構成成分としてもち、敝がその発音）。

㊀　疊字（字を疊ねた表現）。

㊁　也は當然皃に作るべきだ。（『詩』）「召南」（甘棠）に「蔽芾甘棠」といい毛は「蔽芾、小皃」というからだ。此こは「小艸皃（小さい草のさま）」の引伸である。按えるに、『爾雅』「釋言」に「芾、小也」といい、（『詩』「大雅　生民之什」）「卷阿」の毛傳で「茀、小也。芾･茀同字」という。説文には茀字は有るが芾字は無い。「甘棠」は一本（テクスト）は茀に作るが、或る本は市に作り、知ることができない（わからない）。蔽（ヘイ）・芾（フツ）は疊韻（韻母が同じ）で、澤沷（ヒツハツ）、澤沸（ヒツフツ）のよう（入聲による疊韻）である。

㊂　必袂切（ヘイと発音）。十五部。沈重は音は必（卑吉切ヒツ。十二部）。

筆者補注

蔽は『廣韻』では去聲十三祭韻、必袂切（幫母、祭A開韻、開口三等蟹攝）。

古音が段氏15部にある蔽は12部と合韻ではない。古は去聲はないとするので合わないためやや苦戦の様子である。「蔽（ヘイ）・芾（フツ）は疊韻（韻母が同じ）」と先ず設定し、「澤沷（ヒツハツ）、澤沸（ヒツフツ）のようである」としてともに入聲であることを以てするしかないとしたようである（師戴震の合韻説による）。

A　芾には『廣韻』では3音がある。

①　去聲八未韻　方味切（音ヒ、毛萇詩傳曰、蔽芾小皃）、幫母、合口三等止攝

②　去聲十四泰韻　博蓋切（音ハイ・小皃。又方味切）、幫母、開口一等蟹攝

③　入聲八物韻　分勿切（音フツ・草木盛也）、幫母、合口三等臻攝

B　二上3a　必　必

㈡　从八弋（八と弋とを構成成分としてもつ）。

㈢　八亦聲（八はまた同時その発音）

㈠　臬（まと）を樹てて分けるのである。弋は、今の字では杙に作る。

㈡　各本は弋に誤るので、今正す。古くは八は必と同様に讀んだのである。卑吉切（ヒツと発音）。十二部。

参考『廣韻』では、入聲五質韻、卑吉切、幫母、開口三等臻攝

⑬　以上のように多くの例を挙げるのは、今常用される「オワル、ツキル」ではないからだろう。同様に、罕もマレ（尠）ではなく、アミだ。段注の多くの場合と同様、所謂助辞的な意味への言及はしないが、それに近い配慮とみなせるのが、段氏の注釈態度と考える。

三下38a　敾　敾

㈠　敾（此こは複擧字の僅かに存るものの例である）、盡也（つくす）。

㈡　从攴。畢聲（攴を構成成分としてもち畢がその発音）。

㈠　事畢る（ことつきる意）の字は當然此れに作るべきである。畢が行われて敾が廢れてしまった。畢は「田网也」である。

㈡　卑吉切（ヒツと発音）。十二部。

三　アミについて

上述の如く、同義のアミを表わすモジが説文には複数みえることは、人々の暮らしに欠かせない生活の道具であるアミが古くに創られ、それ以後それぞれのアミを表わすモジも逐一作られたことを意味する。そこで、如何にアミのモジが創られたかを考える。

三－1：アミ（网・冂アミ冠、あるいはアミ頭）系

七下40a～43b　网

これまでのことからも容易に推測できるように、最も単純な、字体上（ある意味）アミの初めの文は网であろう。その後に网が形を変え冂（アミ冠）となり、字として増えたことは想像に難くない。部首の网は七下40aにあり、異体字として3種の重文を載せる。

説解

㊀　庖犧氏所結繩、以田以漁也（庖犧氏が繩を結んでつくったもので、田りをしたり漁をしたりする道具である）。

㊁　从冖（冖を構成成分としてもつ）。

㊂　下象网交文（下部は网目状に交わる文様に象る）。

㊃　凡网之屬皆从网（凡そ网の屬は皆て网を構成成分としてもつ）。

段注

㊀　以と田の二字は『廣韵』（上聲・三十六養韻）・『太平御覽』に依って補う。『周易』「繫辭傳」の文だ。①

㊁　（田漁る対象の）其の上を冪うのである（そうして田漁る）。

㊂　メメが网目に象る。文紡切（モウと発音）。（私の古音説では）十部に在る。『五經文字』（二十六叩）に「說文作网、今石經作叩」という。②

重文（段注）

A　罔（罔）　网は或いは亡を加える（亡ボウがその発音）。

B　網（網）　或いは糸を構成成分として持つ（繩を結ぶことによって作るから）。

C　网　古文の网。冖を構成成分としてもち、亡がその発音。

D　罔　籀文。冂を構成成分として持つ。③

筆者補注

この文をば以って、アミの意を表す最も単純な字形といってよいであろう。冖は独立した文で（覆い隠す意）、ワ冠として部首として用いられる。残る要素は、爻は三下 44a に「交也」とあるが、当のメメは説文にない。ゆえに、象形である。この二つの要素からなる网は、「うえからおおう」に着目した象形字と考えれられるからである。二つの要素にから成るように見えるが、分解してはそれぞれ独立して理解できない文であるから、會意ではないのである。

①　十三経注疏本の『周易』「繫辞傳下」には、「古者包犧氏之王天下也。仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物。於是始作八卦。以通神明之德、以類萬物之情。作結繩而為罔罟、以佃以漁」とある。説文の叙とは異なるところもあるが、これ以外にも包犧氏の沒後に神農氏が鋤や鍬の類を創って人々が農耕に便利であるように図り、神農氏が沒してから黄帝・堯・舜も色々な制を創ったこと（木を刳いて舟をつくり、木を剡って楫を創るなど）を記す。また十三経本では、アミは「罔罟」とある（後述参照）。

② 唐代に張参が五経の文字を校勘し著した『五経文字』は唐（開成）石経に刻まれている。よって、石経は唐石経で、そこではアミ頭（ヨコメではなく）が楷書で上げられている。また、段氏の反切は下字が『廣韻』と異なり、小徐に従う。

③ ㊀の「繫辞傳」の最初の字は亡を聲符とする形声文字A（罔）として説文は挙げる。Aにさらに糸（材料）を加えたものがB（網）で今日一般にアミを表わす字で、冖に従う2種は上から覆いかくす捕獲法に因む。古文は戦国時代秦で、籀文はそれ以外の六国で使用されたという説（王国維『観堂集林』巻七所収「戦国時秦用籀文、六国用古文説」）がある。Dは寧ろAから聲符の亡を奪取したようにも思える。

また亡は、十二下45b　亾

㊀ 逃也（にげる）。

㊁ 从入乚（入と乚とを構成成分としてもつ。つまり入って乚（かく）す）

㊂ 凡亡之屬皆从亡。」

㊁ 會意。乚曲（まが）った隱蔽（かくれ）る處に入ることを謂う（意味）のである。武方切（ホウと発音）。十部（段氏の説では网の15部と合韻）。

三－２　网部の所属字

七下40a～43bに网に従う字（単体でなく合体）が、意味の関連とみて続けて33配されている。今日では斯くも種類が多いということに、伏犠だけでなく神農や黄帝など古の聖賢に伝説として仮託して発明されたというほど、中國人にとってありがたくまた生活に欠かせぬ貴重なものだったということを改めて思わせられる。

26字目の罻まではさまざまなアミ類で、それ以後は動詞といえる。

アミの種類では、鳥類・獣類（叙の蹏迒の迒は兎のあしあとというが、特に兎を捕まえると明記されるものがある）・魚類を捕獲する専用の道具で、仕掛けかたにそれぞれ特徴を持つようで、その幾つかはわが国の『三才図会』にも記されている。そのうち、代表としてしばしば上がるアミは、罕と罟、さらに伏犠が創ったと伝えられる羅であろうか。以下に、各字について検討する。

罕七下40a　罕

㊀ 网也（アミである）。

㊁ 从网。干聲（网を構成成分としてもち干（カン）がその発音）。

㊀ 网の一つを謂う（意味である）。（西晋の左思）『吳都賦』（文淵閣四庫全書『文選』

五、劉淵林注）の（普張罼罕）注に「罻・罼・罕皆鳥網也（（罻）罼、罕は皆に鳥を捕獲する網である）」という。按えるに、罕の制（つくり）は蓋ん畢に似ているからであろう。小さい网に長い柄があり、故に（『史記』）「天官書」に「畢曰罕車（畢は罕車である）」という。經傳では叚りて𨑓（音セン・メッタニナイ意を表す）字と爲る。[1]故に（『爾雅』）「釋詁下」に「希、寡、鮮は罕である」というのである。[2]

㊂　呼旱切（カンと発音）。十四部。『五經文字』（二十六叩頭部）に「經典相承隷省作罕（経典では互いに承けあい隷書となっては省略して罕に作る）」という。

筆者補注

㊀　二下1b　𨑓　𨑓

㊀　是少也（是が少ない）。

㊁　是少（少ないことを是（よし）とする）、㊂俱存也（ともにある）。

㊃　从是少（是と少とを構成成分とする＝ここは少ない）。

㊄　賈侍中說（許慎の師である後漢の賈逵の説）。

㊀　『易』「繫辭（傳）」に「故君子之道鮮矣（故に君子の道は鮮ないことだなあ）」といい、鄭本では（鮮は）𨑓に作る。「少也（すくない）」ことをいう。さらに又た「𨑓不及矣」ではある本（テクスト）では亦た同様に鮮に作る。[1] さらに又（『爾雅』）「釋詁」では「鮮、善也」で、ある本では或いは尠に作る。[2] 尠とは𨑓の俗体だ。

㊁　一旦逗（き）れる（読点をうつ）。

㊂　是少の二字は、各本（テクスト）（大小徐本）では譌まって𨑓字（一字）に作る。此こは、上の説解の文の「是少」の意を釋く。是（ぜ）は此（シ）である。俱に存すれば獨り此（とどまる）ことは少ない。故に「是少」という。

㊃　文字の其の形に於いて其の義を得るのである。

㊄　此の字の說は、これを侍中から得たものである。穌典切（センと発音）。十四部。

①―A　『易』「繫辞傳上」「百姓日用、而不知故君子之道鮮矣（世上の人々は日々これを用いていながら、その何であるかを知ろうとはしない。そこで、人間の性を完成する君子の道が世にほとんど行われていない）」で「道鮮矣」の考勘記には「石經、岳本、閩監毛本、同、古本知下有也字。釋文鮮鄭作𨑓」とある。また、「繫辞傳下」「子曰德薄而位尊、知小而謀大、力小而任重、鮮不及（先生は「德が高いのに位が薄く、知力が乏しいのに謀るべきことは遠大であり、また能力が劣っているのに任務だけは重大では、ほとんどそれを果たすことができない……」と説かれた）」では校勘記で小と少が混同されていることを述べたあと、「鮮不及矣」では「釋文𨑓本亦作鮮」とあり、虞翻注には「𨑓不及矣」という。

①－Ｂ　『爾雅』「鮮、善也」とは（「釋詁上」）「儀、若、祥、淑、鮮、省、藏、嘉、令、類、緜、彀、攻、穀、介、徽、善也」。『詩』「邶風・柏舟」の「燕婉之求籧篨不鮮」と「大雅文王之什･皇矣」の「度其鮮原居岐之陽在渭之將萬邦之方下民之王」で「箋云、鮮、善也」という。『玉篇』にも「善也」とある。善は段注では「常衍切、十四部」、鮮は「相然切、十四部」。尠・鮮・尠、及び善は、段氏の14部に全てあるゆえに、合韻で通用は可能（假借）である。

三－３　七下41b　罟　𦊆

㊀　网也（アミである）。㊁　从网古聲。

㊀　（『詩経』）「小雅・小明」の傳に「罟、网也」という。按えるに、魚网といわないことについては、『易』に「作結繩而爲网罟、以田以漁」というので、是れは网罟が皆て專ら漁で施(もち)いられるということではない。罟は實は魚网だが、而し鳥獸にも亦た同様にこれを用いる。故に以下の文字には鳥罟・兔罟があるのだ。

㊁　公戶切（コと発音）。五部。

筆者補注

この段注㊀は重要である。まずアミの意を最も広く基本的に表すモジＡ（文）は、网であることは明らかである。その上で、その下位として一般的にアミを表わすモジＢ（字）があり、さらにそれ或いはそれらを用いて、個別の・狭義の意味を表わす専用のモジがあるということである。説解で多くの場合は、Ａ或いはＢいずれかに修飾語（限定する働き）が付く。兎アミでは、罝（兔网）、罟（兔罟）の順であるのがその例となる。

网に古（聲符）が増いたアミ𦊆は、２段階目のアミを表わす字と見なせる。この字が説解に鳥用・兎用の場合にも用いられていることを段氏は一般的でより広義と見えるモジの段注で述べるのである。この段注は、部首内の文字の配列が字義の関連によるが、その関連には、最初に広義の文字を配し、続けて意味を狭くする（より厳密・それ以外には意味が広がらない）文字が続くことを説くためである。この後に続くモジを読む場合には、大きな参考となる。そして、叙でいう文字の配列に関する原則の補足として、適宜（繰り返し）各字の段注で述べることを原則とするのである。

筆者のみたところ、必ずしもそうではなく寧ろ逆であるように思える配列も部首によってはあるが、広義（まとめる）・狭義（個別・専用）という字義の関連による文字の配列であることには基本的には違いない。また、この原則に拠って、説文を読めば理解しやすいのである。

三－4　七下 43a　罝

㊀　兎网也。（兎を捕るためのアミである）。㊁从网且聲。

㊀　（『詩経』）「周南」（兎罝）に「肅肅兎罝」という。（『爾雅』）釋器（「兎罟謂之罝」）、（「兎罝」の）毛傳では皆に「兎罟也」という。

㊁　子邪切（サと発音）。古音在五部。

三－5　七下 42b　罟

㊀　兎罟也（兎を捕るためのアミである）。

㊁　从网否聲（网を構成成分としてもち否がその発音）。

㊀　郭璞は「子虚賦」に注して「罘、罝也」という。

㊁　縛牟切（フと発音）。古音は一部に在る。秦刻石はその證とすることができる。罟は罘に作る。

筆者補注

ここは反切下字の牟（下平聲 18 尤韻）からすると罟は 3 部だが、否は「古音在一部」とやはりいい違うと主張する。罟が罘と作られるならば、聲符は不（下平聲 18 尤・上聲 44 有・去聲 49 宥・入聲 08 物）ゆえ、段氏の 1 部となり、自説が裏付けられる。罘は『和漢三才圖會』参照。

三－6　七下 42a　羅

㊀　㠯絲罟鳥也（絲で㠯って鳥を罟る）。

㊁　从网从維（网を構成成分としてもち維を構成成分としてもつ）。

㊂　古者芒氏初作羅（古には芒氏が初めて羅を作った）。

㊀　（『爾雅』）「釋器」に「鳥罟謂之羅」という。（『詩経』）「王風」の傳に「鳥網爲羅」という。

㊁　會意。魯何切（ラと発音）。十七部。或いは罹に作るが、俗には用法が異なる（かかる・うれえる意だから）。

㊂　蓋ん『世本』の「作篇」から出たのだろう。

筆者補注

㊀の「王風」の例は見いだせず、「国風」「兔爰」の「有兔爰爰雉離于羅」には、「鳥網爲羅」とある。

㊂の『世本』「作篇」（先秦に成る？）に出たものだろうという「芒氏初作羅」のことは、『太平御覧』八三四で「宋衷曰芒、庖犧之臣」とある。

このアミは伏犠創造によるものではないが、伏犠の家臣が創ったと伝説ではいわれているアミを表わす字である。伏犠の御代がどれほど長かったか不明だが、字を創り出すほど（倉頡より）後のこととは、勿論いえないであろう。

三－7　丰部の屬について

四下 1a　丰　𠦪

㊀　箕屬。所以推糞之器也（箕の屬（なかま）。これで以って糞（お）推してのける道具である）。

㊁　象形。

㊂　凡丰之屬皆从丰。官溥說（凡そ丰の屬は皆て丰を構成成分としてもつ。官溥の說）。

㊀　糞は各本（テクスト）（大小徐本）は弃に作る。今『（玉）篇』・『（古今）韵會（舉要）』に依り正す。「推糞」とは、推してそうして除くことである。

㊁　此の物には柄が有る。（字体は）中部は直すぐで柄に象り、上部には其の（とり除く物を）盛るところがある形に象る。柄を持ち地に迫けて推して、而して前む。穢をのぞき去り、其の中に納めることができる。箕はというと則り柄が無いので、穢を受ける一（だけ）である。故に「箕屬」というのだ。北潘切（ハンと発音）。十四部。按えるに、『（玉）篇』・『韵會』は皆に音は畢（ヒツ）だ。此れは古今で音が同でないのである。

㊂　官溥とは、「博採通人」の一人である。

四下 1b 糞　糞

㊀　棄除也（棄除（す）てる）。

㊁　从廾、推丰糞釆也（合わせた両手を構成成分とし、丰を推して糞釆（のぞきと）る）。

㊂　官溥說侀米而非米者矢字（官溥の說では米に侀るが而かし米ではないものは矢字である）

㊀　按えるに、棄は亦た糞の誤であり、亦た同時に複舉字の未だ刪徐されていないものである。糞は方に「除」を是とし、「棄」を非とすべきである。土部の埅と音義が皆に略ぼ同じである。『禮記』では糞に作り、亦た同様に攘に作り、亦た同様に拚に作る（からだ）。「曲禮」では「凡爲長者糞之禮」といい、「少儀」では「氾埽曰埽。埽席前曰拚」という。『老子』（四十六）では「天下有道。卻走馬以糞」というが、走馬（軍馬）をば用いて糞除（すて）る物を棄てると謂う（意味である）。『左傳』（昭公三年）は「小人糞除先人之敝廬」で、許（慎）は埅を用いて帚める意とする。故に埽除といい、糞には丰（部首）を用いるのだ。故に但だ除というのは、古くは除

穢は糞というと謂い（意味し）、今人は直ちに穢（けがれたもの）が糞というと謂う（意味）のである。此れは、古義・今義の別である。凡そ糞田には多くの場合除いた穢を用いてこれを爲るので、故に糞というのだ。

㈡　三字（双・丰・糞）を合わせ、會意。方問切（フンと発音する）。古音在十四部。

㈢　此れは、官説が篆文の上體を釋いて、釆は米に侶るが米ではないので乃りは矢の字であると偁うのだ。故に𠬞で丰を推して除くのである。矢は、艸部に菌に作り、矢と為る。許慎のときから已に然であったのだ。諸書では多く矢を假りる。（『史記』「廉藺傳（廉頗藺相如列傳第二十一）」の「頃之三遺矢（わずかの間に三度大小の便をした）」の如きが是れである。（このように）許書（即ち説文）では説解中では多く俗用の字に隨う。

四下 1b　棄　𢍏

㈠　捐也（すてる）。

㈡　从𠬞、推丰棄也（廾を構成成分としいてもち、推して両手で棄てる）

㈢　从𠫓。𠫓、逆子也（𠫓を構成成分としてもつ。𠫓は逆子である）。

A　𠬞　古文棄。

B　𢍏　籀文棄。

㈠　手部に「捐、棄也（すてる）」という。

㈡　手を竦えて推して捐てるのである。

㈢　既に𠬞（そろえた両手）に従い會意であることをば以って、さらに又加えてそれで以て箸らかにするのである。𠫓とは不孝の子だから、人が棄てる対象である。棄は詰利切（キと発音）。十五部。

著者補注

ステル意は「かる」とは対極に近い意ゆえ、丰部の最後に置かれた。意味が発展するという点では最も遠いものが置かれるのが同一部首内の配列の原則といえる。

A　古文は竦えた両手で以て竝子をとり去る會意。按えるに、𢍏字は變化して棄に作り、中部の體は世（の字）に侶る。唐人は（李世民の）世（字）を諱んで、故に開成石經及び凡そ碑板（碑版）では皆て弃に作り、近人はといえば乃りは「經典多用古文（経典では多くの場合は古文である棄字を用いる）」と謂う（意味）ことになったのだ。

B　今字は亦た同様に去に従い、𠫓に従わない。

終わりに

どれほど古くかは全く不明だが、創られてよりモジが使われてきた。すべては伝説というが、伏犠やその家臣が創ったと伝えられるアミについては、倉頡にとってそれを表わすモジは創造すべきであったろう。大事な道具として、例えば『三才図会』などに見られるように、その基本的なカタチや用法を変えず今日に伝わるものもあるのである。このようなアミを表わすモジは、説文では大別して2系統に収まる。

一つは、四篇下1bに始まる聿の系統Aで、これに属するのは畢以下3字。部首が柄の先にアミ（箕のような形）がついた道具で、①獵用のアミ、②それでもってトリノゾク（ノゾクベキモノ）、③ステルと発展する文字が連なる。アミは畢1字のみである。

もう一つは、七下40aの网（部首）に始まり、以下33字の系統Bである。

网は、庖犠が創ったと説解に記される縄を結び編んで作った最も原初的な形をもつアミである。続いて、如何なる獵で用いるか、何を捕えるためのアミであるかを区別する文字が連なる。アミ（の名称）以外のことを表わすモジは収められていないといってよい。

いずれも象形によるモジ（文）が各屬の最初に部首としてあるが、B系統では部首网以外は形声字で、网を構成雄成分としてもつアミ類の一つであるそれぞれでは他のアミと異なる違いは発音成分だけに負わせ任せて、ドンドン正しく文から字を増産したように考えられる。最初のいわば素朴なアミが、庖犠が民の豊かな暮らしを願い創造した通り、実生活の進歩に連れて多様になってきた。その多様さを反映した言葉の多さを表わすために、相応しい字が増産されたことを意味しよう。叙の記す如くに想像される。しかし、网は、縄の結び目の形に象る単純にして十分なるゆえか、それ以上の発想の展開はなかったのではないか。

一方、A系統では、アミとはいえ、网を構成上の主要成分としてはもたない。寧ろ、アミという形を持つ道具をどう使うかに焦点が置かれいくらか発展的にもとより創られた文ではないかと思う。自分の手より遠くまで直に範囲が及ぶであろうから、柄をもつアミは画期的だったであろう。しかし、アミとしては使用範囲は手で持ち届くところまで、持てる重さまでの程度ではなかったのかもしれない。この形で果たせることと用法に主眼が置かれ、その発想に続くモジが創られたのではないだろうか。A系統には（積極的な意味で）形声字はなく、幾つかの象形をそのまま生かし合わせた會意による字のみで、文字群としては発展性に乏しいと考えらえるからである。

ゆえに、A系統では、唯一のアミである畢は、そのカタチ（柄付き）から似た他のものの意をまた別途他の義（用法）を表わす傾向が想われる。

アミ、（アミで）蔽う、柄のある星宿（畋を司る）と１語で語義を表わす。また「尽くする（つきる）」は、「（すっかり）蔽う（捉える）」からの発想であろう。

字書の解説としては、段氏のこのような字義の発展変化の実際に言及する態度は、重要である。特に、目に見えない或いは瞬時に消え去り残らないものやこと、具体的に示すことができない（困難）なことなどは、モジとして創造するに困難である。また、必要であるからといって全てのモジを創ることはできないし、またその必要もないであろう。

また、そこで、以上を同義「アミ」を表わす別字、つまり『爾雅』釋詁のような異字同義即ち段氏の転注（載震を承ける）とすると、六書の用のもう一つ叙の六書でいう假借（同字異義）、つまり当て字の用法があるわけで、これは、音が同じ或いは近似である文字通しが通用することで、既にあるＺ字の発音が、モジがないが表したいあることばＸと同じ（近似）であれば、Ｚ字を使ってＸとする（Ｚ＝Ｘ）とするのである。この場合、本来は、もとのＺとＸとは、使用場面が異なるので混乱はない。しかし、時が経ち、この経緯を知らない者は混用する。その後、これを避けるために、場面に応じて区別するための工夫がされる（それぞれの専用モジ、多くは字を創る）ことがある。この混用や本来の字義に理解が及ばぬ大きな理由は、音韻上の変化である。時代と共に字音に変化が生じ、通用が不明になるＺ＝Ｘとならなくなる。字書における適切な解説が必要で、規範となる字書が必要となるのである。

本小稿では、説文のアミを表わすモジ（文を中心）を選び、その発展のさまは段氏の注によって具体的に見てきた。特徴が異なる２系統のアミのうち、一方に古くからの道具であるアミ以外の意味が見いだせたといえる。その発的な意味の中に、所謂助辞のごとき、文字として表わすのが困難と思われる字義が見られたといえるであろう。

段氏は、部首は字形の類似、各部首内の配列は字義の関連で配列されると叙で説く許慎の基本に従う。何故その部首を建てたかということも、後漢当時の思想から考えて、この全宇宙を構成する基本的要素として必要であったからである、と解する。

Ａ系統とＢ系統の部首（象形）が、同じアミでも隔たった位置にあるのは已むを得ないであろう。その位置にそれぞれあることは、前の字形からの類似であるから。しかし、各部首内の文字の配列、つまり発展は、やはり部首そのものに内在する意味、力とでもいうべきものに因るのではないだろうか。

あるモジ（字）が創られたのは、そのモジが内包する意味を如何に発展させ（或いはそれ一つだけであっても）、新たな、欠かせないモジを創り出せるかまで、或いは見通したのではないか。些か、具体的な根拠に欠けることだが、モジには背負って生まれてきたことと、果たすべき使命のようなものが、本来はあるのではないかと思うのである。段氏も

そう考えることも多々あったかもしれないと思ってしまう。勿論、長い年月、ただ使用するものたちによって、字形・字義・字音の全てに譌が生じて、本来の姿が不明になることは段氏が真にしばしば述べるごとくである。そうであれ、説文が字書の濫觴である以上、段氏がその真の面目を回復しようと自説に従い整えた段注をもってすれば、やはりモジにはそもそも負うものがあると思うのである。

注

（1）　黄帝の御代は殷以前の夏王朝より遥か昔と伝説上は設定される。「倉頡創字」の話は戦国時代に作られたという。

（2）　『三才図会』では一見して「人」ではない。三皇・五帝（伏羲犧・神農・黄帝・少昊・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜、禹）は言うまでもなく、歴史上の人物である西周紀元前1120年頃の伯夷・叔斉あたりとは明らかに異なる描き方で、尋常の人ができることではないことを思わせよう。頼惟勤氏は、

> 「天問」の問はまず天地の神話から始まる。由来、中國には神話がないと無造作に説かれる。しかし、これは事実であろうか。思うに、自力で文字を發明した民族においては、その神話は記録さるべくもなかったのではなかろうか。けだし、神話時代には文字はなく、文字ある時代には既に神話は失われていたであろうからである。確に、迅雷風烈には聖人も變じたであろうが、しかしそれは、雷神・風神の單純なる怒りを恐れたわけではあるまい。文字を發明する精神は、自然の變化につけても、或いは君を思い或いは民を憂えるような、高度の精神でなければならない。ただここに、神話信仰の段階にありながら、既成の文字を習得する機會のあるもののみが、神話を記録しえたであろう。・・（略）・・しかるに「天問」においては、歴史の見かたはもっと素朴であり、ありのままである。故に古傳を多く含み、怪異の言が多い。それだけに、合理的に整頓された史書には見えない古人の古史観が、ここには生き生きと寫し出されている。また従って、事の眞相を傳えているところも多い。正史の帝王の系譜、「天問」によって補正する試みが成功した所以である。以上もまた、まだ中原風になじまなかった楚、という考えかたによって理解出来る點である。

と述べられた。（「楚辞」五　（『中國の名著』東京大学中国文学研究室編　1964　勁草書房）説文著述のかなり前の『楚辞』「天問」についてではあるが、指唆に富むと考える。

本稿ででは、敢えて参考に『三才圖會』や寺島良安『和漢三才圖會』などを用いた（末尾付図）。これらの資料は慎重に扱うべきことは言うまでもないが、いま説文の文字説及び段注を考える上で、特徴を捉えた視覚的なひとつの材料と考えたからである。

参考文献

段注の底本は経韻楼原刊本『説文解字注』（所謂段注　上海古籍出版社）で、大徐本（徐鉉『説文解字』）・小徐本（徐鍇『説文解字繫傳』）、丁福保『説文解字詁林』、馮桂芬『段注攷正』、江沅『説文解字音韻表』（皇清経解続編所収）を適宜参考にした。

平凡社　中國古典文学大系　書経・詩経・易経・春秋左氏傳・孟子・史記・漢書

寺島良安　『和漢三才圖會』・明　王圻撰　『三才圖會』・欽定三四庫全書　『三禮圖』

頼惟勤　説文入門　説文会編　大修館書店　1983 年

倉石武四郎　「六書音韵表について」　くろしお出版『著作集 1 』所収　1985 年

戸川芳郎　中国古代思想　岩波現代文庫（学術 318）　岩波書店 2014 年（もと放送大学テキスト）

近藤光男　清朝考証学の研究　研文出版 1987 年

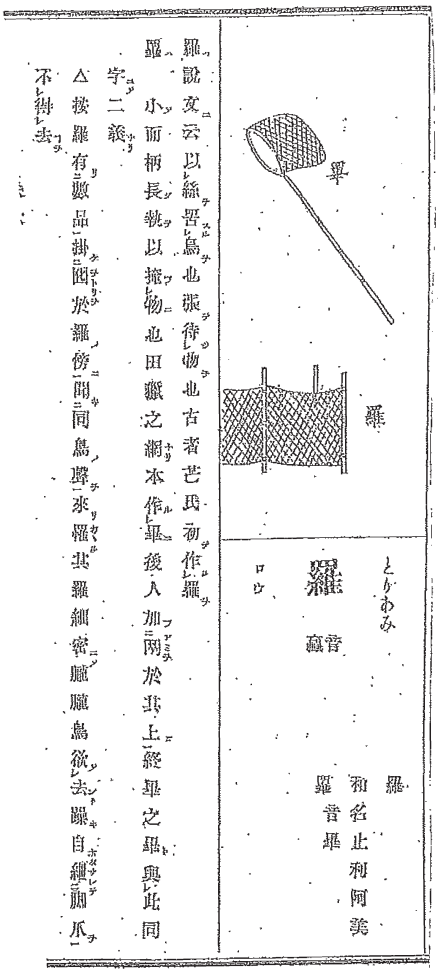
大橋由美　文字学階梯（一）～（六）『新しい漢字漢文教育』　大修館書店　2000 ～ 2004 年

讀段注助辞（一）『二松学舎大学紀要』　2008 年、さらに一連の助辞研究論文（～（七）まで）

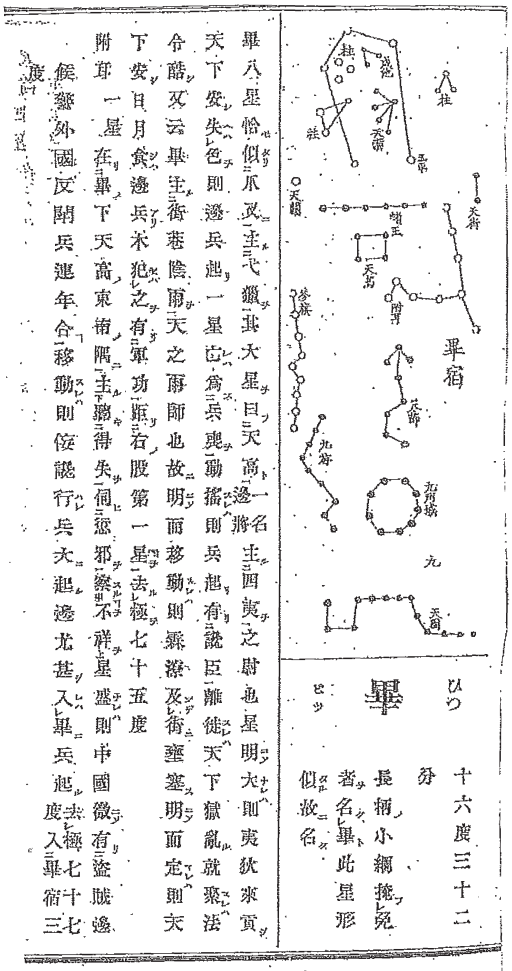
参考図 A

倉頡（『三才圖會』「人物四巻」）

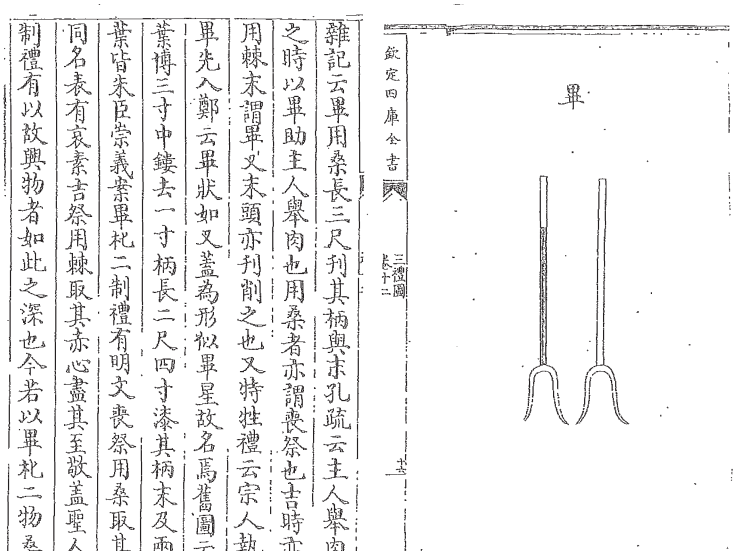
参考図B　畢



B-①アミ（『和漢三才圖會』巻第二十三　漁獵具）

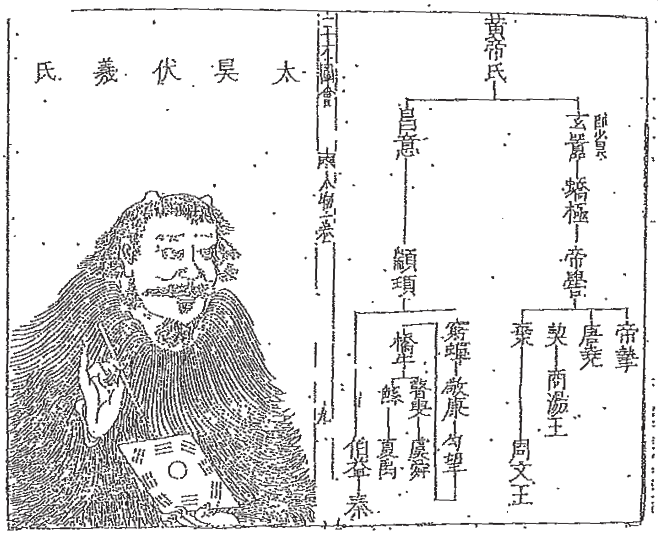


B-②星座（『和漢三才圖會』巻第二　天部　二十八宿）

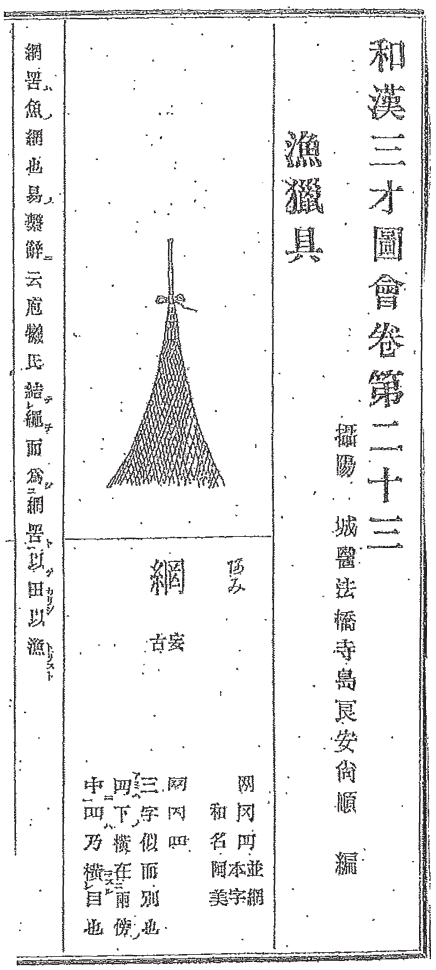


B-③禮器（『三禮圖』巻第十二）

参考図C　A・Bの補足として



C－①伏犠（『三才圖會』「人物一巻」）


和漢三才圖會卷第二十三
攝陽　城醫法橋寺島良安尚順　編
漁獵具
網
古安
ゐみ
網罟魚網也易繫辭云庖犠氏結繩而爲網罟以田以漁
網　網　網　